



Title	初期ポール・ヴィリリオの沿岸主義
Author(s)	小泉, 空
Citation	大阪大学, 2023, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/94754
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 (小 泉 空)	
論文題名	初期ポール・ヴィリリオの沿岸主義
論文内容の要旨	
<p>本博論の目的は二つある。一つは未邦訳の文献が多い、1960年代から1980年までのポール・ヴィリリオの仕事をまとめること。二つ目はこの「初期ヴィリリオ」を、「沿岸主義」という観点から解説することである。</p> <p>第1章で本稿は、ヴィリリオの60年代頃までの経験を記述しながら、沿岸主義の詳しい規定を目指した。そこでわかったのは、ヴィリリオがカール・シュミットに影響を受けながら、沿岸を「はじまり」の場として位置づけていること。しかし同時にヴィリリオがシュミットと異なり、沿岸を出発の場ではなく、何度も繰り返し踏みとどまる回帰の場として位置づけていること。そしてこのヴィリリオ的な「はじまり」の場としての沿岸が、まさにヴィリリオの幼少期と青年期の経験（戦争経験・海の発見・大西洋の壁の発見）、かれの思索の「はじまり」にも見いだせるということであった。</p> <p>第2章で本稿は、60年代にヴィリリオが「建築原理」という建築グループで残した前衛建築、「斜めの機能」を、沿岸主義の観点から読み解くことを目指した。そこでわかったのは、斜めの機能が、直角的・機能主義的に区分された空間を、海と大地が重なり合いながら分岐する沿岸のように、緩やかに分節するものだという事。そして斜めの機能がまた、ヴィリリオにとって、戦時中に見た廃墟の光景（はじまり）への回帰でもあることだった。</p> <p>第3章で本稿は、ヴィリリオが大西洋の壁を分析した著作、75年の『トーチカの考古学』を、沿岸主義の観点から読み解くことを目指した。そこでわかったのは、ヴィリリオが大西洋の壁を、ヒトラーのイデオロギーを参照しながら、海という流動的な力と大地という固定したものの「あいだ」に位置づけていること。またヴィリリオが大西洋の壁を、連合軍の攻撃を写す鏡、戦時の記憶と戦後を媒介する一つのモニュメントとして位置づけているということであった。</p> <p>第4章で本稿は、77年の『速度と政治』、78年の『民衆防衛とエコロジー闘争』でヴィリリオが展開する軍事史を、沿岸主義の観点から読み解くことを目指した。そこでわかったのは、ヴィリリオの軍事史が、絶えずその「はじまり」、古の要塞建設という行為を反復・拡大しながら展開していくものだという事。そしてこの「はじまり」を反復する軍事的なものの歴史が、かつての戦争のトラウマ、自らの「はじまり」を反復するヴィリリオの身振りとならなっていることであった。</p> <p>第5章で本稿は、80年の『消滅の美学』におけるピクノレプシー（小児欠神てんかん）論を、沿岸主義の観点から読み解くことを目指した。そこでわかったのは、ヴィリリオにとってピクノレプシーが、子どもの意識を切断するものだという事。またピクノレプシーは大人になると消滅するにもかかわらず、大人がピクノレプシーを再現すること（はじまりへの回帰）が、テクノロジーの「はじまり」でもあるということであった。</p> <p>第6章で本稿は、『消滅の美学』における、ヴィリリオのキリスト教信仰とテクノロジー論の絡み合いを、沿岸主義の観点から解明することを目指した。そこでわかったのは、ヴィリリオにとってテクノロジーが、誘惑、原罪（はじまり）の反復であるということ。またこの意味でテクノロジーは、単なる手段でも強制力でもなく、無意識に主体に作用するものであるということ。そしてヴィリリオがテクノロジーに抵抗するとき、かれは原罪の手前まで戻り、誘惑に抗おうと踏みとどまっているということであった。</p>	

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (小 泉 空)			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	教授	檜垣 立哉
	副 査	教授	藤川 信夫
	副 査	准教授	野尻 英一

論文審査の結果の要旨

小泉空の論考「初期ポール・ヴィリリオの沿岸主義」は、80年代以降の「速度論」で知られ、とりわけそのメディア論で注目されたヴィリリオの、そうした「速度論」が喧伝される基盤となる初期論考を掘り返すように検討し、そこからヴィリリオの思索を一貫する「沿岸主義」という主題をひきだしてくるものである。ヴィリリオは数多くの著作をものにしたが、本人はステンドグラス職人から仕事を始めた建築家であり、大学人ではない文化人的存在である。本論考は、初期ヴィリリオの『トーチカの考古学』『領土の不安定』から映画論である『消滅の美学』という80年代以前のヴィリリオの、ほとんどは未邦訳である作品に詳細にあたりながら、戦争や政治あるいは美学・メディア論を貫きながらみだしうる「沿岸主義」をとりだし、ヴィリリオの「速度」にかんするメディア論的読解に終止しがちであった状況に新しい視座を提供すると同時に、その施行の広がりを示したものとしておおいに評価することができる。とりわけフランス現代思想研究においても、その名前とスローガンがよく知られながらも、内実を深く検討されることがないヴィリリオにかんする初期研究は世界的にも稀であり、高く評価できる。

本章は六つの章から形成されている。

第一章では、ヴィリリオの幼少期における海岸都市ナントにおけるナチスドイツ戦争体験と、そこで戦争が終結するとともに、ドイツ軍が築いたトーチカのために、戦後になってはじめて海を見るという独自のトラウマ体験を軸として、沿岸という、海と陸という二つの、しかしけって対称的とはいえない存在をみだしていくヴィリリオのあり方を描きだしている。それは後に『トーチカの考古学』としてまとめられる、フランス沿岸に張り巡らされたナチスの軍事要塞の研究につながっていくとともに、ヴィリリオにつきまとう、境界がもつ二重性の意識を強く示すものとなっていく。

第二章では、近代建築の祖といえるル・コルビュジエの「箱」の都市建築に対して、斜めという機能を重視した建築を設計するヴィリリオの建築家としての側面を辿り、こうした斜めというあり方をつくることにおいて、社会のなかでさまざまな領域を接続する仕組みをつくるヴィリリオのあり方をみだしていく。

第三章においては、まさにナチスドイツが大西洋に作成したトーチカという軍事要塞と壁にかんする考古学的研究をおこない、後年の「速度」の研究につながっていく、ある戦略性をみるとともに、そこですでに廃墟になった建築物への視線を明確にする。

第四章では『速度と政治』『民衆防衛とエコロジー闘争』が主題化され、戦略論の展開がはかられていることが検討される。たとえばそこではカエサルが古代の戦争において、砂漠という「海」を征服することをもくろみながら、やはりそこでは空虚な砂漠と都市という「沿岸」というテーマが浮き彫りなる点が重要である。

第五章では『消滅の美学』があつかわれ、そこで初期映画であるメリエスの作品がもつ、「ピクノレプシー」という事態が重要視される。ピクノレプシーとは小児性癲癇のことであるが、ここにも「はじまり」としての幼児の意識という「沿岸性」が見られることを確認し、カイヨワの遊び論のなかでの「めまい」をもとりあげつつ、これが初期映画のメリエスや、マレーの映像において重要な構成要素であったことが指摘される。それは初期映画の経験において大人が子供であったことを再構成するような役割を果たすものであるといえ、やはりある種の沿岸主義的なあり方を示す。

最終章のテクノロジー論では、ヴィリリオがテクノフォビアであったかという検討からはじめ、議論が今度はテロルを『創世記』の反復とみなすというあり方にまで転換していくことを示し、沿岸はここではいわば人類の始ま

りや宗教的なものの始原という場面まで拡張されることになる。こうした展開は、速度やテクノロジー論が、他方ではキリスト教的な宗教性の問題にまで射程を拡げていることを示すものである。

以上のように本論考は、初期ヴィリリオのあり方をこれまでになかったかたちで展開し、かつそこに、沿岸主義というきわめて応用可能性にみち、海と陸、砂漠と都市、子供と大人、人類の始まりというさまざまな場面においてそれが原理として働いていることをひきだしたといえる。この点において、本論文の示す射程は大変広いものといえ、おおいに評価できるものとなっている。

以上、論文審査の結果、本論文は博士(人間科学)の学位を授与するのにふさわしいものと判定した。